

「思い煩う」(ルカ一二・二二—三二)について

田 辺 明 子

一

nepeivō (心配する) およびその同根語は、新約聖書において多用されてはいないけれども、少なからず用いられている(動詞 *nepeivō* 一九回、複合動詞 *eponepeivō* 一回、名詞 *népeiva* 六回、形容詞 *anépēivos* 二回、合計二八回。これらの出所は福音書一八、パウロの手紙九、公同書簡一)。しかも神学的に顕著な文脈において用いられている。たとえば「種蒔きの譬の説明」(マルコ四・一九、マタイ一三・二二、ルカ八・一四)、「思い煩うな」(マタイ六・二五—三四に六回、ルカ一二・二二—三二に三回)、「未婚者とやもめについての勧め」(コリント人への第一の手紙七・二五—三五に五回)。本論文では「思い煩うな」のルカによる福音書のテキストを取り上げて検討し、新約聖書における *nepeivō* の神学的意味の一端を明らかにしたいと思う。

ちなみにこの語の宗教的背景は、キツテルの『新約聖書ギリシア語辞典』*nepeivō* *ἐπὶ* の項目(R・ブルトマン担当)によるとおおむね次のとおりである。この語はヘシオドス(紀元前七〇〇年頃)ないしソポクレス(前五世紀)以来古典ギリシア語において多用されていたが、七十人訳ギリシア語聖書その他のヘレニズム・ユダヤ教文献および原

始キリスト教文献においてはそうではない。もっともストア、ヨセフス、フィロン、『十二族長の遺言』にはこの語は欠如しているものの、*σοφίας, φουρτεις* で以て代用されている。七十人訳聖書にはこの語が一九回出てくるが、その用語法は古典ギリシア語におけるそれとまったく一致していて、いわば世俗的(フルトマンの表現では「普遍的に人間的」)なものである。「神学的に意味のあるのはただ一カ所である。すなわち詩篇五四・二三『あなたの心配を主に投げかけよ、*κύριε*と主はあなたを支えられる』(*ἐπιβραβου ἐπὶ κύριου τὴν μέριμνάν σου, καὶ ἀντὶς σε διαβήσεις*)」。

二

ルカ二・二二―二三⁽²⁾はマタイ六・二五―三四に並行していて、出所はQだとされている。⁽²⁾ 両方のテキストをアライントの『福音書異同一覽』⁽³⁾によって示せば、次のとおりである。

マタイ 6, 25-34

ルカ 12, 22-32

<p>ὕμῶν μὴ μεριμνᾶτε τὴν ψυχὴν ὑμῶν τί φάγητε ἢ τί πίνητε, μὴδὲ τῆ σῶματι ὑμῶν τί ἐπιθύσηθε· οὐχὶ ἡ ψυχὴ πλεῖον ἔσται τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐπιθύματος ; ²⁵ἐμβλέψατε εἰς τὰ πετενῶν τοῦ οὐρανοῦ ὅτι οὐ στείρουσιν οὐδὲ θροῖσονται οὐδὲ ἀποθνήσκουσιν, καὶ ὁ πατήρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος τρέφει αὐτά· οὐχ ὑμεῖς μάλλον διαφέρετε αὐτῶν ; ²⁷τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύνα-</p>	<p>²⁵Διὰ τοῦτο λέγω ὑμῶν μὴ μεριμνᾶτε τὴν ψυχὴν, μὴδὲ τῆ σῶματι· οὐχ ἔσται τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐπιθύματος ; ²⁶κατανοήσατε τοὺς κόρνακας ὅτι οὐ στείρουσιν οὐδὲ θροῖσονται, οἷς οὐκ ἔσται ταμείων οὐδὲ ἀποθνήσκουσι, καὶ ὁ θεὸς τρέφει αὐτούς· πόσῳ μάλλον ὑμεῖς διαφέρετε τῶν πετενῶν. ²⁵τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύνα-</p>
<p>²⁵Διὰ τοῦτο λέγω</p>	<p>²⁵Εἶπεν δὲ πρὸς τοὺς μαθητὰς αὐτοῦ· διὰ τοῦτο λέγω</p>

「聖書類」(ルカ二・二三―二四) 五〇二

ταυ προσθελίαι ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ πῆλυν ἔνω ;

²⁸ καὶ περὶ ἐπιθυμίατος τί μεριμνᾶτε ;
 καταμάθετε τὰ κρίαια τοῦ ἀγροῦ πῶς ἀνέξανουσιν οὐ κο-
 πῶσιν οὐδὲ κηθουσιν ²⁹ λέγω δὲ ὑμῖν ὅτι οὐδὲ Σολομὼν
 ἐν πάσῃ τῇ θόξῃ αὐτοῦ περιεβλέπετο ὡς ἐν τούτῳ. ³⁰ εἰ δὲ
 τὸν χρόνον τοῦ ἀγροῦ σήμερον ὄντα καὶ αὐθιμον εἰς κλί-
 βανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὐτως ἀμφέβυσσιν, οὐ πολλὸν
 μέλλου ὑμεῖς, ὀλιγόπιστοι; ³¹ μή οὖν μεριμνήσητε λέγοντες·
 τί φάσιν μεν ; ἢ τί πίνομεν ; ἢ τί περιβιβάσμεθα ; ³² πάντα
 γὰρ ταῦτα τὰ ἔθνη ἐκείνησιν οἶδεν γὰρ
 ὁ πατήρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος ὅτι χηΐσετε τούτων ἀπάντων.
³³ ἤγρευτε δὲ πῶσιν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ καὶ τὴν
 δικαιοσύνην αὐτοῦ, καὶ ταῦτα πάντα προστεθήσεται ὑμῖν.
³⁴ μή οὖν μεριμνήσητε εἰς τὴν αὐθιμον, ἢ γὰρ αὐθιμον μεριμνή-
 σει ἔαυτης· ἀρεσθὼν τῇ ἡμέρᾳ ἡ κακία αὐτῆς.

ταὶ ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ προσθελίαι πῆλυν ; ²⁸ εἰ οὖν

οὐδὲ ἐλάττωστον θύνασθε, τί περὶ τῶν λογῶν μεριμνᾶτε ;
²⁹ κατανοήσατε τὰ κρίαια πῶς ἀνέξανει οὐ κο-
 πᾶει οὐδὲ κηθῆει· λέγω δὲ ὑμῖν, οὐδὲ Σολομὼν
 ἐν πάσῃ τῇ θόξῃ αὐτοῦ περιεβλέπετο ὡς ἐν τούτῳ. ³⁰ εἰ δὲ
 ἐν ἀγρῷ τὸν χρόνον ὄντα σήμερον καὶ αὐθιμον εἰς κλί-
 βανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὐτως ἀμφέβει,
 μέλλου ὑμεῖς, ὀλιγόπιστοι. ³¹ καὶ ὑμεῖς μή ἤγρευτε
 τί φάσιν μεν καὶ τί πίνετε καὶ μή μετεωρίσασθε· ³² πάντα
 γὰρ πάντα τὰ ἔθνη τοῦ κόσμου ἐκείνησιν οἶδεν.
³³ πλὴν ἤγρευτε τὴν βασιλείαν
 αὐτοῦ, καὶ ταῦτα πάντα προστεθήσεται ὑμῖν.
³⁴ Μὴ φοβοῦ, τὸ μικρὸν πόλλιον, ὅτι ἐπιδοκῆσεν ὁ πατήρ
 ὑμῶν δοῦναι ὑμῖν τὴν βασιλείαν.

両方のテキストを見較べると、次のような五つの疑問が出てくる。

- ㊦ マタイはルカよりも「配する」が、この語義は厳密には何であろうか。
- ㊧ マタイ六・三二の「*μή μεριμνήσητε*」と「*ἀρεσθὼν*」が、並行箇所ルカ二・二九の「*μή ἤγρευτε*」……*καὶ μή μετεωρίσασθε* (……*ἀρεσθὼν*「*不安になる*」)と「*ἀρεσθὼν*」の「*ἀ*」が「*α*」の「*α*」

に説明されるだろうか。またこの *γενεια* の語義は厳密には何だろうか。

(三) マタイ六・三一では *οση* (だから) が用いられているが、並行箇所ルカ二・二九には *ετι* (そして) あるいは「……もまた」が用いられている。この *ετι* の語義は何であろうか。

(四) マタイ六・三五の *τα εδωκ* (異邦人) は並行箇所ルカ二・三〇では *τα εδωκ τον κοδιον* (直訳すれば「世(界)の異邦人」となっている。付加語 *τον κοδιον* の意味は何であろうか。

(五) マタイ六・二五および三一では三つの疑問文 *τι φάγητε η τι πίητε* (何を食べようかあるいは何を飲もうか)、*τι ενδύσασθε* (何を着ようか) が登場する(ただし三一節では間接疑問文が直接疑問文になっており、また第三の疑問文は *τι περιβαλέσθε* (何をまとうるか) になっている)。並行するルカ二・二二では「何を食べようか」「および」「何を着ようか」の二疑問文であり、そして二九節では「何を着ようか」が脱落して、代わりに「何を飲もうか」が入っている。このちがいはどのように説明されるだろうか。

以上の五つの問題を順番に考察していくというしかたで本論文を進めていく。

三

さて問(一)であるが、まずはじめに *περιβαλυ* の辞書的語義を確かめておこう。キツテルの『新約聖書ギリシア語辞典』 *περιβαλυ* の項目⁽¹⁾において、ブルトマンはまずこの語の古典ギリシア語における用語法をあげている。それが新約聖書におけるこの語の用語法の土台となっているので、それを引用すると「*περιβαλυ* (*περιβαλμα*) はドイツ語の *soigen* (*Sorge*) の全意味範囲を含む」。私見ではドイツ語 *soigen* (*Sorge*) に相当する日本語語彙は「心配する(心配)」である。

⁽¹⁾「思い煩う」(ルカ二・二二―三二)と同じく

次いで「ルトマンはこの語の原義を二つあげている。「a、誰かないし何かのために心配する、氣遣う(das Sorgen für jemanden bzw für etwas)。自分自身について心配しているのが自明の場合、この『……のために』(für)という点は言及されないでいる。b、心配しながら、あるいは注意深く何かに関する(das sorgende oder besorgende Sich-Kümmern um etwas)」。私見では、これは日本語の「心配する」が「誰かないし何かのために心配する、氣遣う」という心・氣の、働き・状態を基本としながら、「心を配る」が必然的に手足・身体を使って人の世話をしたり、物を調達したり(ドイツ語の besorgen)、「具体的に何かに関することに発展するのに対応している。ルトマンによると「このような『……のために、心配する』および『……に、関る』(Besorgsein für und um)は未来の方向をもち、そしてそのゆえにcあるいはdの意味が派生する。c、何かを捜し求める、何かに向かって努力する。d、何かに対する心配気な期待、来たるべき何かへの不安。この未来への関連が後退し、そしてほとんど消失してしまうことがあり、そうするとeあるいはfの意味になる。e、何かについての悲嘆、苦惱。この場合 *Leid* (苦痛)の意味に近づく。f、とつおいつ思索する、くよくよ考える、思弁する、詮索する」。

さてわれわれの問題はルカ二・二二、二五、二六(並行箇所マタイ六・二五、二七、二八、三二、三四)の *peprouāu* の語義であるが、現行の文脈全体の要となっているのはルカ二・二二(並行箇所マタイ六・二五)の *peprouāu* である。なぜならこのペリコーペの文脈は二つあるいは三つの段落に分けることができ(ルカでは二二―二八節・二九―三二節・マタイでは二五―三〇節・三一―三三節・三四節)、意味の上で最も重要なのは第一段落であって、第一段落を受けて第二・第三(段落が結論となっている)からである。さらに第一段落の内部をみると、ルカのテキストで言う二二節と二三節とのあいだには意味のつながりがあるが、それが二三節と二四節との間では切れている。「魂が食物より大切な

ものであり、身体は着物より大切なものである」という二三節の命題は発展させられることなく途切れているからである。二四節「鳥をよく見よ……」と二七・二八節「百合をよく見よ……」とは内容・文体・語彙があいまって美しい対をなしているが、その間にあって二五・二六節は浮き上がっていて、内容(意味)がその前後といまひとつしっくりと調和していない。ブルトマンが『共観福音書伝承史』のなかでこのテクニストの成立について述べていることも、わたくしの読み方を支持している。ブルトマンはマタイのテクニストに沿うて論述しているのであるが、それによるとまず「六・二七が二次的挿入として分離され、その次に三四節が本文の重複となる補遺(doppelter Nachtrag)として分離される。残りの構成がどこまで統一をなしているかは、はっきり言えない。二五節は独立のロギオンであったと考えられる。

二六・二八―三〇節については、もともと独立していたのが二五節に結合されたのだろうとも考えられるし、そうではなくこれは二五節の敷衍であったとも考えられる。三一―三三節はおそらく二次的敷衍であったと言ってまちがいないだろう。したがってブルトマンもマタイ六・二五／ルカー二・二二がペリコーペ全体の要だと言っているのである。

だからわれわれはまずルカー二・二二c d／マタイ六・二五b cの *nepeianu* の語義を考察しよう。この箇所(7)の構文はすべて「*tu* *nepeianu* + 利害の与格 + *tu* (思案の接続法)」である。*tu* は基本的には疑問詞である。したがって、*tu* 節は間接疑問文であるから、本文の動詞 *nepeianu* は疑惑ないし熟考を内容とする動詞でなければならぬ。そうすると前述の *nepeianu* の原義二つのうちでは、bよりもaだと推論される。aはbよりも精神の働き・状態を問題にしており、「誰か(ないし何か)のために心配する、気遣う」は疑惑ないし熟考をも内容とすることがあると考えられるからである。もっともその場合前述のfの意味に近くなる。fだと解釈した場合「思い煩う」という訳が出てくる。なお誰(ないし何)のための心配かという点、ルカー二・二二では「魂のために」、「身体のために」と述べ

られていて、結局は自分自身のためである。ルカ二・二二の訳は「あなたがたは魂のために何を食べようかと、そして身体のために何を着ようかと心配する(思い煩う)な」となる。

次にルカ二・二五の分詞 *periphras* であるが、二五節は現行の文脈では二一・一六―二二節の「愚かな金持の譬」を思い出させるので、このなかの一七節の「心の中で思い巡らしていた」(*Dehorticero et curat*)を二五節の *periphras* が受ける形になっている。したがってこの語義は前述(五八頁)の *f* である。

次にルカ二・二六の *periphras* であるが、ブルトマンによると二六節は、二五節の挿入を、前後の文脈に滑らかに繋ぐための編集句である。⁽⁶⁾ そう考えると、二六節の *periphras* の語義は二二節、二五節と同様 *a* と *f* である。二六節 *b* の訳は「なぜあなたがたは他のこと(＝着物)について心配する(思い煩う)のか」となる。わたくしの専らに関心はルカのテキストにあるので、マタイのテキストの *periphras* については省略する。

四

次に問(二)である。 *Crete* の原義は「捜す」であるが、ルカ二・二九においてはこれに *ca* に始まる間接疑問文「何を食べようかそして何を飲もうか」が続く。これも思案の接続法であるから、この *Crete* は前述の二二節の *periphras* と同様に疑惑ないし熟考の動詞でなければならぬ。ハウプは *Crete* の原義「捜す」から派出する意味として「調べる」(ドイツ語では *suchen* から派出)つて *untersuchen* (中を調べる、中をたずねる)」、研究する、考える」を挙げ、*Crete* に思案の接続法の間接話法が続く用例をこのなかに含めている。すなわち *ca* マルコ一・一八、一四・一、一一。マ、ルカ二・二九、*to* マルコ二二・二。そうするとルカ二・二九の訳は「何を食べようかおよび何

を飲むうかを考えるな」である。なおドイツ語訳聖書はルカ二・二九の *ἔσται* を fragen (問う) で以て翻訳している(ルター訳、統一訳、ツヴィングリ訳、新エルサレム聖書ドイツ語版)⁽¹¹⁾。

それでは同じく疑惑ないし熟考を表わす動詞であるとしても、二九節の *ἔσται* と二二節の *ἠερίψατο* とのちがいはどこにあるのだろうか。この点に關しては、*ἔσται* は基本的に「人間の努力および意志方向」⁽¹²⁾を内に含んでいて、他方 *ἠερίψατο* には「意志」よりも「心配・氣遣い」の要素があると言える。先に挙げた *ἔσται* に間接語法が続く用例の日本語訳(聖書協会訳・新共同訳)⁽¹³⁾を見ると、*ἔσται* の訳として「考えていた」とも「謀った」「計った」「ねらっていた」というような意志方向を濃厚に表現した訳がある。*ἔσται* という語自体には「心配・氣遣い」のニュアンスがないから、ルカは二二・二九において *ἦν ἔσται*……(考えるな)に *καὶ ἦν ἠερίψατο* (そして不安になるな)を付け加えたのではないかと思う。おそらくこの箇所はマタイ六・三二の *ἦν ἠερίψατο* の方が○の元来のテキストであって、ルカがそれを書き換えたのだと思う(わたくしの理解では *ἠερίψατο* ≠ *ἔσται* + *ἠερίψατο* である。記号 ≠ は nearly equal を意味する)。なぜルカが二九節において *ἠερίψατο* を *ἔσται* に書き換えたかという二〇節の *ἐπέσται* (伝承)(意味は *ἐπὶ* が強調の接頭語であるから、「渴求する」)との対照のため、ちよつと三一節の *ἔσται* (伝承)(求める)との対照のためである。畢竟三一節の *ἔσται* を準備し、強調するためである(本論文第七節参照)。

五

次に問(三)であるが、ルカ二・二九文頭の *ἐπὶ* については三通りの解釈が可能である。プラス／デブルナ／レーコプフの『新約聖書ギリシア語文法』は並列接続詞 *ἐπὶ* の記述に際して、連係的(*copulativ*) 驟辭的とも訳せる(意味の

「思ひ煩う」(ルカ二・二三―三三)について

ku (そして) を、より古い副詞的意味の *ku* (……もまた) から区別している。⁽¹⁵⁾ バウアの『新約聖書ギリシア語辞典』の *ku* の項目においても同様である。ルカー二・二九文頭の *ku* については副詞的意味に解釈するかたと、連係の意味に解釈するかたとがある。後者についてはさらに二通りの解釈がある。

(一) 副詞の意味の *ku* が *hikan* にかかっていると解釈する。すなわち「あなたがたも、何を食べようかそして何を飲もうかを考えてはならない、そして不安になってはならない」。この解釈をしているのは日本聖書協会訳、新共同訳、ルター訳である。この解釈は二九節の *hikan* (あなたがた) 以前に、何を食べようかそして何を飲もうかを考える (*hikan*) 存在があることを前提している。しかしながらそういう存在は見あたらない。二四節の「鳥」はそういう存在に該当しない。鳥については「種播きもせず、刈入れもしない。彼らには納屋もなく、倉もない」と語られているだけである(つまり農業労働もせず、所有もしないという点で鳥はイエスの弟子たち＝巡回伝道者と同類項である)。そもそも鳥という存在は、何を食べようか、何を飲もうかを意志を以て考える (*hikan*) ことをしない。付言するならば、同様に鳥については、何を食べようかを心配する (*hikan*) とかしないとかという問題もおこらない。⁽¹⁶⁾ このような理由で解釈(一)は成立しない。

なおルカー二・二九において *hikan* は三〇節の *ta ebon tois koinon* と対照させるために、わざわざ主語として書き出され強調されている(本論文第六節参照)。

(二) ルカー二・二九の *ku* は連係の意味であって、「結果を表わす *ku*」(*ku* consecutivum) だと解釈する。すなわち前文を受けて「だからあなたがたは何を食べようかそして何を飲もうかを考えてはならない……」となる。この *ku* はしたがって並行箇所マタイ六・三一の *ou* と同じ意味である。プラス／ダブルナ／レコープフはこの解釈である。⁽¹⁷⁾

ルター訳はこの *kaú* を解釈(一)であるとともに(二)でもあるように訳している (Darum auch ihr……)。統一訳ドイツ語聖書、新エルサレム聖書ドイツ語版、NEB⁽¹⁸⁾は解釈(二)である。ところで二九節の前文は、種播きも刈入れもしない鳥を神が養っていること(二四節)および労せず紡がない百合を神が装わしていること(二七・二八節)を語っている。これを受けて「だから、あなたがたは何を食べようかそして何を飲むかを考えてはならない……」では片手落ちである。ルカ一二・二九には「何を着ようか」が脱落しているのである。したがってこの解釈も芳くない。

(三) ルカ一二・二九文頭の *kaú* は連係的 *kaú* であって、段落(二二―二八節)と段落(二九―三三節)とを連係する。意味の上では事実上二二節と二九節を結ぶ。すなわち「あなたがたは何を食べようかを心配してはならないし、何を着ようかを心配してはならない……そして何を食べようかおよび何を飲むかを考えてもならない」。この *kaú* は、二二節の *hēpōmēka* と二九節の *hēpōmēka* とを、すなわち同じように疑惑ないし熟考を表わしながら、相連もある二つの動詞を連係しながら、対照もさせているのである。しかし対照のニュアンスよりも連係の意味の方が強いから、「反意の *kaú*」(*kaú adversativum*) (しかし)ではない。同じく「そして……も……ない」を意味する *kaú* はルカ六・三七b文頭にも見いだされる⁽¹⁹⁾。解釈(三)を支持しているのはツヴィングリ訳である。すなわち **Und ihr—fraget [doch] nicht, was ihr essen……**

六

次に問句に入る。前述(本論文六二頁)のとおりルカ一二・二九では *hēpōmēka* (あなたがたは)というふうになぎわぎ主語が書き出されて強調されているが、これは三〇節 a の *ta éþur tuú kōouou* と対照されている。また三〇節 b では

「思い煩う」(ルカ一二・三三)でつづいて

υἱου (あなたがたの) が *ο πατριου* (父) に先立って文頭に出され、これもまた *τα εθνη του κοσμου* に対照されている (並行箇所 マタイ六・三二) は *ο πατριου υἱου* の語順である)。このようにルカのテキストではマタイにおいてよりも *υἱους* すなわち弟子たちと *τα εθνη του κοσμου* との対照が際立たせられ、両者がまったく違ったあり方をする ことが印象づけられるのである。それではこのルカ二・三〇の *τα εθνη του κοσμου* が何であるのか、並行箇所 マタイ六・三二の *τα εθνη* (異邦人たち) とまったく同じ意味であるのかどうか、そのことが考察されねばならない。

シュルツはルカ二・三〇について「ルカだけが *εθνη* を、*του κοσμου* というふうにより厳密に言い表わしている。説明のための二次的付加⁽²⁰⁾と述べている。エレミアスは反対説である。すなわち「ルカが *κοσμου* を用いているのは(つまりパウロおよびヨハネとちがって)、まったく稀であり(マタイ八回、マルコ二回、ルカ三回/行伝一、ヨハネ七六回、パウロ四七回、その他四五回)、そしてそれは既製の言いまわしを借用している場合だけである。すなわちルカ二・五〇、一二・三〇、九・二五、行伝一七・二四。ルカのお気に入りの語は *οικουμενη* であり、これをかれはルカ四・五において *εθνη* と(マタイ四・八)に代置している⁽²¹⁾」。ちなみにルカが *οικουμενη* を用いているのは、福音書三回、行伝五回である。ルカの *εθνη* の用例四つにあたってみても、エレミアスの説は説得力がある。そしてエレミアスはルカ二・三〇について *τα εθνη του κοσμου* = *ummot ha'olam* だとしている。もとをたたせばシュトラック・ピラベックがこの解釈をしている⁽²²⁾。それによると *ummot ha'olam* は「イスラエル以外の人類を呼ぶためにラビたちが最多用した呼称の一つである。*ummot* は *umma* (部族・国民) の複数形であり、この語は旧約聖書に三回出てきて、いづれもイスラエル以外の民族を言い表わすのに用いられている。*ummot* は実は複数合形成であり、それに *ha'olam* (時代、代、世界) がくっついて修飾しているので、*ummot ha'olam* は直訳すれば「世(界)の異邦人」である。シュ

トラック・ピラベックはラビ文献中の当該箇所を *die Völker der Welt* の訳をあて、エフシユタイン編『ソシチ
ーノ・タルムード』⁽²³⁾ は *(the) heathens* も *Gentiles* である。したがってエレシマス説をとるとするならば、
ルカー二・三〇の *šūn̄ rōš kōrōn* は *Q* 伝承にあった言葉で、⁽²⁴⁾ 「異邦人」を意味する *ʾum̄mōt haʾolan* のギリシア語
訳である。この解釈をおおむね支持しているのは Plummer, Marshall である。⁽²⁴⁾

七

最後に問(田)である。ルカー二・二二では「何を食べようか」および「何を着ようか」の二つの疑問文が問題になっ
ているのであるが、二九節では「何を着ようか」が脱落して、代わりに「何を飲もうか」が入ってきている。二九節
で衣の問題が脱落することは、すでに二六節において準備されている。つまり並行節マタイ六・二八においては「な
ぜあなたがたは着物 (*tributa*) について心配するのか」であるのに、ルカでは「なぜ他のもの (*ta kōnta*) について心
配するのか」というふうにぼやかされている。

並行するマタイのテキストでは六・二五および三一節の二カ所とも「何を食べようか」「何を飲もうか」「何を着よ
うか」の三つの疑問文がそろって並べられている。⁽²⁵⁾ (前述五七頁参照)。

以上の問題点はまず文体上の側面から、次いで内容上の側面から検討される。文体上の問題として、このペリコー
ペにおいてマタイは三つの文あるいは三文肢を好み、ルカは二つの文、二文肢を取っている。マタイ六・二五とルカ
一二・二二との比較としてマタイ六・三一とルカー二・二九との比較はすでに見た。この他にマタイ六・二六では「種
も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない」(三文)であるのに対し、ルカー二・二四では「種も蒔かず、刈り入

「思い煩う」(ルカー二・二二―二三)について

れもせず、「納屋も倉も持たない」(二文、二文版)。最初のマタイ六・二五／ルカ二・二二に關していえば、「魂のために」に二文が続くマタイよりも、一文が続いて次の「身体のために十一文」と均衡を保つルカの方が、文体上洗練されている。したがって文体上きこちない方が古く、洗練されている方が新しいという本文批評の原則により、マタイの方がより古いテキストの形を示している。マタイ六・二六／ルカ二・二四についても同じことが言える。マタイ六・三一／ルカ二・二九については、マタイ六・二五／ルカ二・二二についての結論から推論して、マタイの方がもとのテキストに近いと考えられる。⁽²⁶⁾

次に内容の問題に入る。仮にわたくしの文体上の考察を認めて、マタイの方がテキストのもとの形を示しているとしても、ルカが二二節において魂についての二つの疑問文のうち「何を食べようか」を残し、「何を飲もうか」を捨てたのはなぜかという問に答えなければならない。答は簡単である。おそらくより肝要な方を選んで、「何を食べようか」で以て「何を飲もうか」をも代表させているのだろう。⁽²⁷⁾次にルカが二九節において「何を食べようか」と「何を飲もうか」を取り、「何を着ようか」を脱落させた理由は次のように考えられる。ルカ二・二九—三二(「思い煩うな」のペリコーペ全体の第二段落)は「祈り」のペリコーペ(一・一一—一三)と共通の語彙が多い。すなわち「求めん」(ζητετω 二二・二九、三〇、三二／一・九、一〇)、「必要とする」(χρεια 二二・三〇／一・八)、「父」(ὁ πατήρ 二二・二九、三二／一・二、一一、一三)、「御国」(ἡ βασιλεία αὐτοῦ/οὐ 二二・三二、三三／一・二)、「与える」(δοῦναι 二二・三三／一・三、七、八、八、九、一一、一二、一三、一三)。「とここで「祈り」のペリコーペにおいて、求める対象としてあげられている物質はすべて食物である(三、五節 パン／一節 魚／二二節 卵)。ここでは祈り求めるべき対象は、そして祈りが聴かれて与えられるのは、必要なものであることが基本的

に言われている(三節⁽²⁸⁾、五節⁽²⁹⁾、八節、なお一〇・四二参照。マルタは不必要なことを主イエスに求めたので聴かれなかった)。だから生存にまず必要な物質として食物があげられているのだらう。それに合わせて、つまり「祈り」のペリコーペに辻褄をあわせることを念頭に置いて、一二・二九においては〇伝承にあった三つの疑問文のうち、食物に結びつく「何を食べようか」と「何を飲もうか」を残し、「何を着ようか」を脱落させたのではないだらうか。(六一頁に前述したとおり、ルカが一二・二九において *aspiciamus* を *sciretur* に書き換えたのは、三二節の *sciretur* (伝承) を引き立てるためであるが、それは同時に三二節の *sciretur* から一一・九、一〇の *sciretur* への連想を、より緊密にするためでもある)。だからといって事実上、衣の問題が切り捨てられたというわけではない。ここにおいても、一章においても、問題になっているのは「生存に必要な物質」であって、それを要約した表現として「何を食べようかそして何を飲もうか」が(文体上二文をあげねばならないので)とりあげられ、そして「パン」(一・三、五)がとりあげられている。いわば「何を食べようかそして何を飲もうか」で以て「何を着ようか」をも代表しているという側面がある。

八

以上でルカ一二・二二―三三に関する五つの間に答え終えた。もとより本論文のテーマはこのペリコーペにおける「思い煩う」(*anagnorizein*)の神学的意味である。このペリコーペのテーマ「衣食について思い煩うな」(三二節)は、三二節の「むしろ御国を求めなさい。そうすればこれらは加えて与えられるであらう」でいわば結論に達している。そしてこの三二節をどう解釈すべきかという問題が残されている。

わたくしは一二・三二は「祈り」のペリコーペ(一一・一―一三)から解釈されるべきだと考える。前述のとおり「思

思い煩う」(ルカ一二・二二―三三)について

い煩うな」のペリコーペの第二段落(一二・二九—三三)は、「祈り」のペリコーペと共通の語彙が多いので、思想的に連関しているように思うのである。一二・三一の「御国を求めなさい」の「求める」(*syteiv*)は一一・九、一〇の *syteiv* に関連しているのではないだろうか。一一・九「捜せ、そうすれば見いだすだろう」(*syteire kai eufhete*)の思想は、「神を捜し求めるならば、神を見いだす」という旧約聖書の言語によって形成されている(申命記四・二九、イザヤ五五・六、六五・一。なおロマ一〇・二〇参照)とマーシャルは述べている。⁽³⁰⁾そしてマーシャルはこのような *syteiv* がエレミヤ二九・一二、一三(七十人訳三六・一二、一三)において、祈りに並行して述べられているのに注目して、ルカ一一・九の三つの句(「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。門をたたきなさい、そうすれば開かれる」)はすべて祈りにあてはめて解釈されるべきだ、と述べている。⁽³⁰⁾ 言うまでもなくルカによる福音書においては、「求めよ、さらば与えられん云々」の断片(一一・九—一三)〇は、「主の祈り」(一一・一—四)〇(〇)そして「真夜中にパンを乞う人の話」(五—八節)(ルカ特殊資料)の次に置かれていて、これら三つの断片は「祈り」のテーマのもとにまとめられたものと思われる。そこで一二・三一の「御国を求めなさい」(*syteire thn Basileian*)は一一・九、一〇の *syteiv* (神を尋ね求める↓祈る)を媒介として、一一・三の「主の祈り」の「御国が来ますように」という祈りに結ばれる。

また一二・三一の「これら」は二九節の「何を食べようかそして何を飲むか」の答となる食物を指し、そして三〇節においては「これをあなたがたが必要とすることをあなたがたの父は知っている」と述べられているので、一一・八の「かれが必要とするものは何でも」に結び付く。ある人が真夜中に到着した友に出すパンがないので、別の友の家へ行き、パン三つを乞うたところ、その友がかれに与えるのが「かれが必要とするものは何でも」というのであ

る。パン三つは大人一人の一回の食事量であるので、この話は一一・三の「主の祈り」の「わたしたちの生存に必要なパンを日毎に与えてください」の例話であるとも解釈できる。そこで一二・三一bの「これらは加えて与えられるだろう」は一一・八の *offerens* を媒介にして、「主の祈り」のパンを求める祈りに結ばれる。

したがって一二・三一は「主の祈り」から解釈されるのではないだろうか。G・シュナイダーは語彙の連関からというよりも、むしろ思想・資料の連関から、一二・三一を「主の祈り」から解釈して次のように述べている。³¹⁾『御国を求め』で以て意味されていることを、(○)においてすでに「主の祈り」が認識させてくれる。御国が来ますようにという祈り(一一・二c)は、神の意志への服従(一一・二b)にひじょうに緊密に結合している。このロギオンはもちろん、弟子たちの食物が『添え物』加えて与えられるもの』として理解されているというほど、父の御国をすでに現在あるものとして見てはいない。『御国』を求める者は、それにもかかわらず(今すでに)日々の糧を受け取る(一一・二、三)。結末のロギオン(一二・三二)―イザヤ四一・一四を思い出させるものであり、そして元来孤立して伝承されていた―は将来の御国の賜物についての神の決定を語っている。今日のコンテキストにおいて(あなたがたの父・御国という鍵言葉が三〇・三一節と連関していることを参照)も同様に、将来の手渡しが考えられている。これによると二三・三一の「御国」は将来に到来するものであるがゆえに、「そうすればこれらは加えて与えられるだろう」も御国到来の終末時に実現することとしてシュナイダーは理解している。ルカによる福音書に盛んに出てくる神の国での宴会(食事)のことが考えられているのかもしれない(二三・二九、一四・一五以下、一六・二三、二二・三〇参照)。けれども『御国』を求める者は、それにもかかわらず(今すでに)日々の糧を受け取る(一一・二、三)とシュナイダーは続けている。一一・二bにおいて「御名が聖とされますように」と祈られていることは、御国が(す

でにイエスにおいて)開始されていることを認め、神の支配が現在において成ることを祈ることを意味する。そうすると一・二・三一は「御国 \parallel 神の支配」の現在および将来における実現を祈る者が、現在において日々の糧を、将来において神の国の宴会に与ることを意味している。

九 (結 論)

ルカの「思い煩うな」のペリコーペ(一・二二—三三)における「思い煩う」(*anagasthai*)の、とうとうよりはここにおいて思い煩うことが禁止されているから、「思い煩う」の禁止の神学的意味は次のように考えられる。

一、このペリコーペのテーマは衣食についての心配の禁止であるが、衣食についての心配が起る原因は、神のわたしたちへの配慮(すなわち神の支配 \parallel 神の国)がわたしたちの眼中にないことが明らかにされている。衣食についての心配を止めるために、鳥・百合への神の配慮つまり自然界における神の支配に注視することが勧められている(二四、二七・二八節)。もちろんこの思想はすでにQのものであり、マタイの並行記事も同じ思想を述べている。

二、他た、*periphrasi*(思い巡らす、心を配る)が無益であるから、それを止めるようにという言い方もなされている(二五・二六節)。

「心配することが無益だ」というこの考え方は、「無益」の内容が多少異なるけれども、パウロにも見いだされる(一コリ七・三三—三五)。パウロがコリント教会の人々に「思い煩わないでいること」(*anagasthai*)を勧めるのは、かれら自身の利益を思つてのことである(*pros to vobis autem scribo*)とかれは述べている。

ルカが「心配することは無益だ」と言うのは、人間の能力の及び届かない領分すなわち寿命の問題が「思い巡らす」

対象となつてゐるからである。これはパウロが、*metanoia* (思い煩う) は知力 (*gnosis*) の働きに属してゐて、人知の及ばない領分に人知を働かすことが「思い煩う」ということだと暗示してゐるピリピ四・六、七に通ずる。

心配することは無益だという思想もすでにQのものである。ただルカは「思い煩うな」のペリコーペの直前に「愚かな金持の譬」(ルカ特殊資料)を配置することにより、具体的に、より鮮明にこの思想を提示してゐる。この点がマタイとちがう。

三、ルカは衣食についての心配の禁止を、積極的には御国を求める祈りの勧めへと転じてゐる。これは神の支配(意志)への服従のもとに(主の祈りの第一・第二の祈り)、衣食についての必要が満たされるといふ思想の表白である。これはまた、烏・百合ともちがうし、異邦人ともちがうイエスの弟子たちが、衣食についての心配に対して処す道である。つまりイエスの弟子たちは衣食について心配するが、巡回伝道者であるので衣食を生産するための労働ができない。烏・百合は労働もしないが、心配もしない。異邦人は心配も労働もするが、神を知らない。

これもまたすでにQに含まれてゐる思想であらう。けれどもルカは *requesto* (求める) という語を効果的に用ゐる工夫を施したりして、「思い煩うな」のペリコーペを「祈り」のペリコーペ(一一・一一—一二)に、そのなかでも特に「主の祈り」に緊密に結びつけてゐる。そうすることにより衣食についての心配を御国を求める祈りに転化させ、そして「主の祈り」に則つて必要な衣食を神に祈り、神の御手からそれを受け取る道をひらいてゐる。

思い煩いを祈りに転化してゐるのは、ピリピ四・六、七においても同様である。ペテロ第一の手紙五・七も祈りを暗示してゐる。すなわち「あなたがたのすべての心配を神に投げかけ(なげけ)」(*pasan tyn thetikon vuton eniphiastes en' autou* (=*tau theou*))。そしてこの箇所でもわたしたちの思い煩いを神への祈りに転化する根拠として、神のわた

Seder Mo'ed, II, Pes 8a (p. 35): Gentiles; Seder Mo'ed, IV, RH 4a (p. 9): heathens.

- (24) A. Plummer, *Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. Luke* (ICC), 1989^s (1896^t), p. 328. ただし本書は *toš kōšav* が伝承か、ルカ編集句かという問題には触れておらず; I.H. Marshall, *ibid.*, p. 529.
- (25) もっともマタイ六・二五では二つの疑問文が、そして六・三一では三つの疑問文がきつあるいは)で結ばれており、他方ルカ二・二九では二つの疑問文は *καί* で結合されているという相違があるのであるが、本論文ではこの点に立ち入りなす。
- (26) シュルツはマタイ六・二五b/ルカ二・二三に關して「マタイの疑問文の形の方が、ルカにおける *καί* で以て接続された叙述文——これに起因するであろうのが、疑問のうちかに含まれている不確実性要因を排除し、そして事実により大きな重みを与えるという傾向である——よりも生き生きとしており、そしてそれゆえにテキキストのより古い形を示している。ルカは二四節でも直接疑問文を抹消している。……」

タイ六・三一/ルカ二・二九では「マタイの直接疑問文の方がルカの間接疑問文よりも、*καί* を用いより古いテキキストの形である」と述べている。 *ibid.*, S. 149ff.

- (27) ルカ一〇・十七の *ἐδίδουτες καὶ πλυνούτες* は「入節に於いて *ἐδίδουτες* を代表された」。
- (28) *εὐδοκίως* というのは、*ἐν τῷ WNT* の当該の項目の1の解釈すなわち *εὐδοκίως ὀφείλα* を遡源して「生存に必要な」とする解釈をする。
- (29) エレミヤスによると「*ἐν τῷ* 三つは今日を言っている。一人分の一回の食事量として通用している」。 *ἐν τῷ* スチナの村の語 *ἐν τῷ*。 J. Jeremias, *Die Gleichnis Jesu*, 1967 (1947), S. 157.
- (30) Marshall, *ibid.*, p. 467.
- (31) Gerhard Schneider, *Das Evangelium nach Lukas* (Ökumenischer Taschenkommentar zum Neuen Testament), 1984, S. 286.